〔論文〕

教員養成校における音楽指導技術の育成

ー子どもの方を見ながら伴奏する技術についてー

竹　下　則　子
Noriko Takeshita

大阪総合保育大学大学院
児童保育研究科　児童保育専攻

保育者が鍵盤楽器などで伴奏する時に子どもの方を見ることは、子どもとコミュニケーションをとりながら表現指導を行うためにも重要である。学生は実習において伴奏をする機会があるが、子どもの方を見ることなく鍵盤や楽譜を注視したまま伴奏していることがしばしば見受けられる。その原因として、学生が大学の授業で弾き歌いや伴奏を練習する際に、子どもの方を見ながら伴奏練習をする機会がないことが挙げられる。

前回の研究[1)]では、20 名の学生が子ども役の学生を見ながら伴奏する自身の録画映像を視聴し、振り返りの機会を持つことが技術獲得に効果があることを検証したが、子ども役の学生を見ながら伴奏する詳細な時間の長さや顔の向く角度については言及していなかった。

そこで今回は鍵盤楽器の学習経験に差異がある３人の学生を対象に子ども役の学生を見ながら伴奏する時間の長さや顔の向く角度がいかに変化するのかについて調査を行った。

その結果、子ども役の学生を見ながら伴奏する時間は回数を重ねるごとに長くなり、顔の角度や頻度の数値も上昇した。また学習経験の乏しい学生も同様に、子ども役の学生を見ながら伴奏ができるようになり、鍵盤楽器の学習経験に差異があっても、いくつかの方法や対処法を用いて練習を重ねることで、これらの技術習得が可能であることを明らかにした。

キーワード：保育者、鍵盤楽器による伴奏指導法、伴奏技術、伴奏者の視線

Ⅰ　研究の背景と目的

1　はじめに

幼稚園教育要領、保育所保育指針、ならびに認定こども園教育・保育要領は、2018 年度に改訂されたが、この改訂での大きな変更点の一つとして「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の子どもの姿」が設定された。これは、これまでの５領域を踏まえ、５歳児終了までに育ってほしい姿をより具体的に示したものであるが、その中の１つに「豊かな感性と表現」がある。これは子どもたちが幼児期の終わりまでに、どんな音楽を耳にして感性と表現を育くむかということ、つまり子どもたちが、毎日、接している保育者の声や音楽の質が、子どもたちの心身の発達、感性や表現に大きく関係しているということである。したがって保育者の音楽的資質（＝豊かな感性や表現力）が子どもたちの感性を育むことにつながる大切な役割を果たしていると考えられる。それでは保育者における音楽的資質の問題点とは何か、その問題点に対して保育者養成校ではどのような取り組みが必要であろうか。

その問題の１つとして学生が幼稚園・保育園・小学校での実習時に歌唱の伴奏をする機会があるが、実習指導者から「楽譜やピアノの鍵盤を終始、凝視するのではなく、子どもの方を見ながら伴奏をするように」との指摘を受けることがある。学生は大学の授業で弾き歌いや鍵盤楽器などで伴奏を練習するが、子どもたちや周辺の様子を見ながら伴奏の練習をする機会がなく、この技術を使用した伴奏ができない場合が多い。

子どもの方を見ながら伴奏する先行研究としていくつか例を挙げてみると、西海、笹井、細田（2017）は「音楽やピアノ学習の経験が少ない学習者にとってピアノ弾き歌いなどは困難な領域で～保育では子どもたちの様子を見ながら、という要素も加わるので、保育場面での弾き歌いは「歌う」「伴奏する」「子どもの方を見る」という３つの行為を同時に行う極めて複雑で高度な音楽技術といえる。限られた養成年限の中で子どもたちと歌や音楽の楽しさを共有できるような弾き歌いを習得するには～コード伴奏法が有効なのではないか」と論述し、保育場面で子どもを見ながら歌ったり伴奏したりすることの難しさとコード伴奏の有効性について指摘している[2)]。

子どもが音や音楽で遊び、表現する楽しさを味わうために、保育者は自身の音楽的な技術の向上に努める必要があるが、『保育所保育指針』「第５章　職員の資質向

上」の中で「子どもの最善の利益を考慮し～それぞれの職務内容に応じた専門性を高めるため、必要な知識及び技術の修得、維持及び向上に努めなければならない。」としている[3)]。また『文部科学省協力者会議報告書』「幼稚園教員の資質向上に関する調査研究　幼稚園教員の資質向上について　自ら学ぶ幼稚園教員のために」の中で、「幼児一人一人の内面を理解し、信頼関係を築きつつ、集団生活の中で発達に必要な経験を、幼児自らが獲得していくことができるように環境を構成し、活動の場面に応じた適切な指導を行う力をもつことが重要である」[4)] と記している。後藤（2017）は「目標としては笑顔で子どもたちの方を向きながら伴奏でき、弾いて歌う喜びを感じることである。」[5)] と述べており、小澤（2009）は「楽曲の始まりを明確に伝えたり、子どもたちの反応を見ながら授業を進めるために、余裕をもった弾き歌いをできることが重要となる」[6)] と述べている。

これらのことから保育者が音楽的な技術の向上をめざし、適切な指導を行う力を習得することによって、つまり子どもの顔を見ながら歌いかけることで、子どもに楽しい雰囲気を伝えたり、コミュニケーションをとったりすることが可能になるだろう。また保育者が教室の様子や子どもの安全を確認するためにも鍵盤や楽譜だけではなく、色々な方向に注意を向け、余裕を持って伴奏することは重要であると考えられる。

その他に「子どものうた」の伴奏をする保育者の視線の研究として、山本・鈴木（2018）が一斉保育の現場で調査を行っている[7)]。この研究では保育者４名が「子どものうた」のピアノ伴奏をする様子を動画撮影し、保育者の視線に注目して、保育者が伴奏中に鍵盤と楽譜を見ている箇所と子どもたちを見ている箇所の両方を記録している。図１は著作権に抵触しないよう曲の構造を小節のみで示している楽譜の１例である。黒く塗りつぶされているところが子どもたちを見ていた部分であり、白い部分は鍵盤や楽譜を見ていた部分である。

筆者はこの先行研究からヒントを得て、子どもたちの前で伴奏をした経験のない学生を対象により詳細な考察を行うこととした。山本・鈴木の論文では、伴奏練習が１回のみのデータを使用して調査を行っているが、練習を重ねた後の変化や結果については記述がなく、対象者の鍵盤楽器の学習経験や熟達度も明らかにされていない。そこで今回の研究では①鍵盤楽器の音楽経験の差が子ども役の学生の方を見ながら伴奏する技術に影響している。②子ども役の学生の方を見ながら伴奏する練習を積み重ねることによって技術を習得することが可能である。という仮説をたて、練習経験の差異が及ぼす子どもの方を見ながら伴奏する技術習得の影響について考察を行うこととする。

２　筆者による先行研究

（１）学生の伴奏技術習得に対する関心と意欲の事前調査

前回の研究[1)] では「伴奏技術習得に対する関心と意欲について」の質問紙調査を行った。「保育者が子どもや教室の様子を見ながら伴奏するところを、学生が実習中に目撃したか」について質問したところ、学生 20 人中 12 人が見学したと回答した。このことから保育者が日常的に子どもや教室の様子を見ながら伴奏していることが推察できる。

次に「学生が実習中に子どもや教室の様子を見ながら歌唱指導や伴奏をすることができたか」の質問には、20 人中２人ができたと回答し、ほとんどの学生が子どもや教室の様子を見ながら伴奏や歌唱指導をする機会がなく、また機会があってもこれらのことができないことがうかがえた。しかし「子どもや周囲の様子を見ながら伴奏することは保育者にとって必要か」の質問には「非常に必要である」と「必要である」が 90％を占め、ほとんどの学生が「子どもや周囲の様子を見ながら伴奏することが必要である」と回答した。さらに「その技術を習得したいか」の質問には全員が「習得したい」と回答し、学生は子どもの方を見ながら伴奏をする技術の習得に関心と意欲があることが明らかとなった。

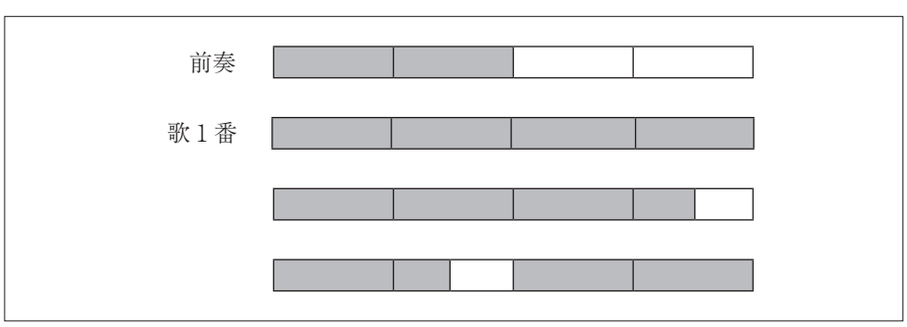


図１　曲の構造を小節のみで示している楽譜の１例（山本・鈴木 2018）

（2）先行研究における調査対象

Ｋ短期大学の学生20人を鍵盤楽器の学習経験によって、それぞれ４つのカテゴリーに分類した。内訳は鍵盤楽器の学習経験が１年未満の学生３人、２年以上５年未満の学生８人、５年以上10年未満の学生６人、10年以上の学生３人である。

（3）伴奏の予習

伴奏練習１回目にむけて伴奏の予習を行った学生は全体の65％であった。その後、伴奏練習１回目の録画を視聴後、話し合いによる振り返り学習を行ったが、振り返り学習によって伴奏の対処方法がわかり、伴奏練習２回目前の予習では85％の学生が練習を行うようになり、練習時間も長くなった。伴奏練習３回目前の予習では、ほぼ全員が予習を行ない、徐々に積極的に練習を行い克服しようとする意欲や姿勢がうかがえた。

（4）子ども役の学生の方を向いて伴奏する方法

伴奏練習１回目終了後に録画映像を視聴後、自身を振り返り、話し合う時間を設けた。話し合いの結果、子ども役の学生の方を見ながら伴奏するために次の方法が導き出された。①暗譜をする必要がある。②鍵盤楽器に向かって椅子を約60°斜めに置くか、もしくは子ども役の学生と約90°の角度で対面するように椅子を置くことにより、子ども役の学生の方に体が向きやすくなると同時に周辺の様子が見やすくなる。③子ども役の学生が見やすくなる場所を譜面台上で見つけて楽譜を置く。④鍵盤楽器の前で子ども役の学生からできるだけ遠い位置に椅子を移動することで、子ども役の学生の方を見ながら鍵盤楽器が弾きやすくなるなどであった。続いて、学生たちは子ども役の学生を見ながら伴奏する方法のほかに、伴奏途中にミスタッチをした後の対処法として次の方法を考案した。①コードなどの簡易伴奏を使用したり、片手だけで伴奏するなどの手段を使用する。②間違った音を弾いても、そのまま弾き続け、修正可能な箇所で正しい音に修正する。などである。

これらの対処法を用いることによって鍵盤楽器の演奏経験にかかわらず、話し合いで導き出した上記の方法や対処法を使用して学生たちが練習を行うことにより、徐々に問題点を克服し、学生全員が伴奏技術を習得することができた。

授業終了後の質問紙調査では20人全員が歌唱指導能力の習得には子どもや周囲を見ながら伴奏を弾く技術が必要であると考え、またこの練習により伴奏技術が向上したと回答した。

Ⅱ　今回の研究目的と方法

１　研究目的

前回の研究では20名の学生を対象に子どもの方を見ながら伴奏する技術の習得方法について一定の成果を得ることができたが、今回の研究では20名の中から鍵盤楽器の学習経験が違う３名の学生を抽出し、伴奏練習を重ねることによって子ども役の学生に向けられる時間や伴奏者の顔、首や体の角度がどのように変化するのかについて、より詳細に分析・考察を行うこととする。

２　研究方法

（1）研究方法と倫理的配慮

研究方法は、保育者役の学生が子ども役の学生を見ながら伴奏する練習を週に１回ずつ計４回行った。伴奏練習１回目終了後にビデオカメラで撮影した学生の録画映像を視聴し、諸問題の対処法を話し合うこととした。

なお今回の調査を実施するにあたり、個人情報保護についての適切な手続きがなされた上で、掲載許諾を得た。また個人情報保護のため、図表に加工処理を施している。

（2）調査対象

Ｋ短期大学にて「音楽３」の授業を受講する学生20人（２回生）のうちの３人を鍵盤楽器の学習経験の視点から比較対象として選出した。

学生Ｓ　鍵盤楽器の学習経験が約10年以上である。
学生Ｎ　鍵盤楽器の学習経験が約６年未満である。
学生Ｄ　鍵盤楽器の学習経験が約３年未満である。

（3）期間

2016年12月２日～2017年１月６日

（4）留意点

選曲は対象学生の任意としたが、楽曲自体の難易度が高い曲や、速度が速い曲の場合は、伴奏をする難易度も高くなるため、簡単な曲を選曲し、速度を落として伴奏することを推奨した。なお選曲には、伴奏しやすいようにアレンジされている楽譜集を使用した。途中で曲を変更すると、練習の結果にばらつきが生じるため、４回とも同じ曲を練習することとした。

（5）分析の視点

この３名の演奏を観察し、ビデオカメラで記録したものを時系列解析して下記に掲載した。特に次の４つの項目に視点をおいて分析した。

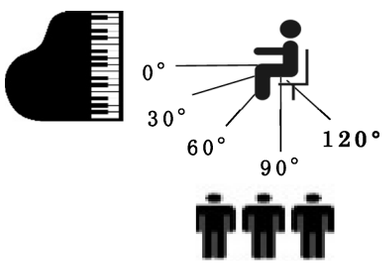
１点目…鍵盤楽器の学習経験の差による技術習得への影響について
２点目…伴奏練習における回数の増加に伴う子ども役の学生を見ながら伴奏する時間の増減や変化について
３点目…伴奏練習における回数の増加に伴う、首、顔や体などの角度の変化について
４点目…動画視聴後の話し合いで自らの伴奏を客観的に視聴する経験がその後の伴奏にいかなる変化を与えるかについて

（６）分析方法

①学生の顔、体や足の角度の画像分析

学生の顔、体や足の向きを撮影した映像をもとに、何小節目にどれぐらいの角度で子ども役の学生の方を向いて伴奏するのかを分析した。

表１　保育者役の学生が子ども役の学生に向ける顔の角度について



※鍵盤楽器に向かって鍵盤もしくは楽譜を見ながら伴奏している顔の角度を０°とした。保育者役の学生が子ども役の学生に向ける顔の角度を30°、60°、90°、120°の割合で記載した。

②伴奏分析図の分析

学生Ｓ、学生Ｎ、学生Ｄの伴奏しているところを撮影した映像をもとに分析図を作成した。分析図には下記の記号を用いて記録した。

表２　記号の説明

記号１	－－－－	楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している部分
記号２	○○○○	子ども役の学生を見ながら伴奏している部分
記号３	▲▲▲▲	リズムや拍子が不安定になった部分
記号４	××××	ミスタッチの部分
記号５	▬▬▬	著作権の関係により、歌詞及び音型を公表しないために楽譜の一部を加工した部分

③伴奏分析表

学生Ｓ、Ｎ、Ｄの伴奏分析図と録画映像を視聴して得たものから伴奏分析表を作成した。伴奏で反応があった部分に記号（－－－－）（○○○○）（▲▲▲▲）（××××）で表示し、反応があった小節にその時間（秒）を記載した。

④伴奏グラフ

鍵盤や楽譜の方を見ながら伴奏している時間と子ども役の学生の方を見ながら伴奏している時間をグラフ上で比較した。

３　学生Ｓの伴奏分析

（１）学生Ｓの画像と伴奏分析図による分析

図２　伴奏練習１回目

図３　伴奏練習２回目

図４　伴奏練習３回目

図５　伴奏練習４回目

学生 S	鍵盤楽器の学習経験が約10年以上 （4歳～15歳までピアノを習う。ソナチネ程度を学習済みである。）
題材名	ミュージカル劇「　　」より「　　」

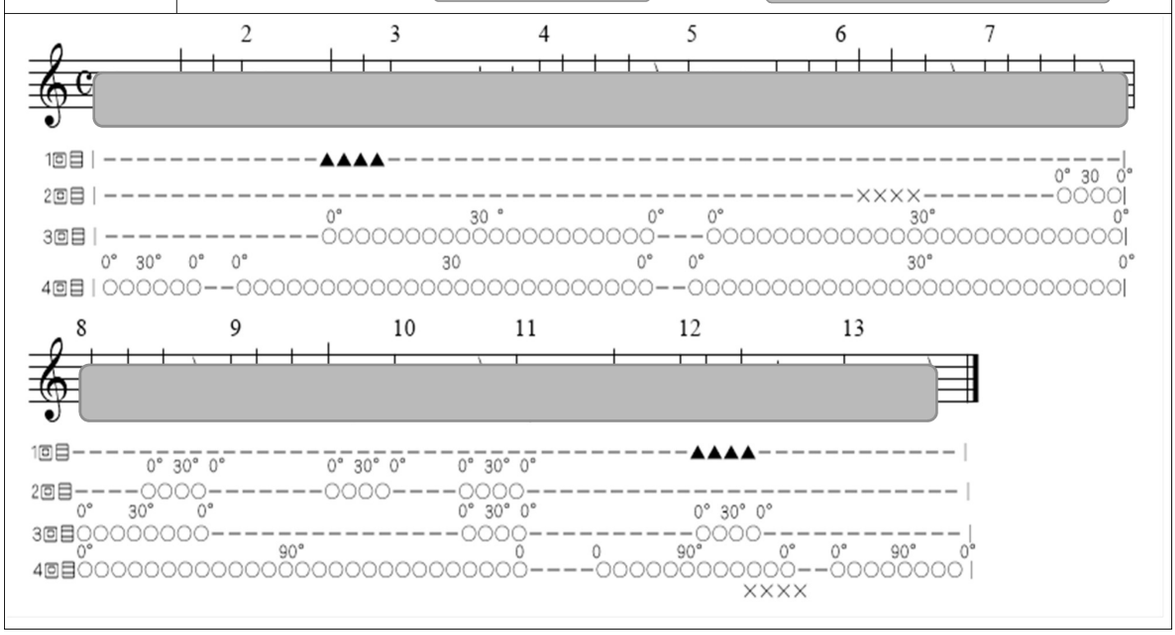


図６　学生Ｓの伴奏分析図

伴奏練習１回目（図２参照）では、顔や体のすべてが鍵盤楽器の方を向いている。また図６の伴奏練習１回目を参照すると、記号（－－－－）が曲の最後まで継続していることから、子ども役の学生の方を全く見ることなく伴奏していることがわかる。

２小節目および12小節目はリズムや拍子が不安定になった部分（▲▲▲▲）である。

伴奏練習２回目（図３及び図６参照）では、７小節目、８小節目、９小節目、10小節目に記号（○○○○）があるが、これらの４か所では子ども役の学生に顔を約30°向けることができている。

伴奏練習３回目（図４参照）の画像を参照すると、顔は鍵盤の方をまだ見ているが、体や足は学生の方を向くことが可能になった。図６の伴奏分析図を参照すると、約30°の角度で５回、子ども役の学生を見ながら伴奏できたことが見てとれる。

伴奏練習４回目（図５及び図６参照）では、ミスタッチはするものの、全13小節中、11小節分の長さまで子ども役の学生を見ながら伴奏ができるようになった。顔、体や足のすべても、約30°の角度で３回、約90°の角度で３回、子ども役の学生の方を見ることが可能になった。

（2）伴奏分析表及び伴奏時間のグラフによる分析

表３　学生Ｓの伴奏分析表

伴奏	伴奏で反応があった部分	反応があった小節	反応があった時間（秒）	反応があった時間の合計（秒間）
伴奏練習１回目	－－－－（楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している部分）	１～13 小節目	28.00	合計 28.00
	▲▲▲▲（リズム・拍子の不安定部分）	２小節目	03.10 ～ 03.60	00.50
		12 小節目	22.30 ～ 23.30	01.00
伴奏練習２回目	－－－－（楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している部分）	１～７小節目	00.00 ～ 15.20	15.20
		８小節目	15.60 ～ 17.60	02.00
		９小節目	17.80 ～ 19.60	01.80
		10 小節目	19.90 ～ 21.70	01.80
		11 ～ 13 小節目	22.00 ～ 28.00	06.00
				合計 26.80
	××××（ミスタッチ）	６小節目	12.00 ～ 13.00	01.00
	○○○○（子ども役の学生を見ながら伴奏している部分）	７小節目	15.20 ～ 15.60	00.40
		８小節目	17.60 ～ 17.80	00.20
		９小節目	19.60 ～ 19.90	00.30
		10 小節目	21.70 ～ 22.00	00.30
				合計 02.20
伴奏練習３回目	－－－－（楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している部分）	１～２小節目	01.00 ～ 03.30	02.30
		４小節目	08.30 ～ 10.40	02.10
		９～ 10 小節目	16.30 ～ 21.30	05.00
		11 小節目	21.40 ～ 24.00	02.60
		12 ～ 13 小節目	24.40 ～ 28.00	00.60
				合計 12.60
	○○○○（子ども役の学生を見ながら伴奏している部分）	２～４小節目	03.30 ～ 08.30	05.00
		５～８小節目	10.40 ～ 16.30	05.90
		10 小節目	21.30 ～ 21.40	00.10
		12 小節目	24.00 ～ 24.40	00.40
				合計 11.40
伴奏練習４回目	－－－－（楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している部分）	１小節目	02.30 ～ 03.00	00.30
		４小節目	09.00 ～ 09.30	00.30
		11 小節目	24.30 ～ 26.00	01.30
				合計 01.90
	××××（ミスタッチ）	４小節目	08.00 ～ 10.00	02.00
		12 小節目	26.00 ～ 26.30	00.30
	○○○○（子ども役の学生を見ながら伴奏している部分）	１小節目	00.00 ～ 02.30	02.30
		２～４小節目	03.00 ～ 09.00	06.00
		５～ 10 小節目	09.30 ～ 24.30	15.00
		11 ～ 13 小節目	26.00 ～ 28.00	02.00
				合計 25.30

伴奏練習１回目（表３参照）では、楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している部分（－－－－）は全小節28.00秒間にわたって楽譜もしくは鍵盤を見ながら演奏していた。

２小節目と12小節目にそれぞれ00.50秒間と01.00秒間、リズムや拍子が不安定になった部分（▲▲▲▲）があった。

伴奏練習２回目（表３参照）では楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している部分（－－－－）は１～７小節目、８小節目、９小節目、10小節目、11～13小節目の合計26.80秒間であった。

反対に子ども役の学生を見ながら伴奏している部分（○○○○）は７小節目、８小節目、９小節目、10小節目で合計02.20秒間であった。

伴奏練習３回目（表３参照）では楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している部分（－－－－）は１～２小節目、４小節目、９～10小節目、11小節目、12～13小節目で合計12.60秒間であった。一方、子ども役の学生を見ながら伴奏している部分（○○○○）は２～４小節目、５～８小節目、10小節目、12小節目で合計11.40秒間であった。

伴奏練習４回目（表３参照）では楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している部分（－－－－）は１小節目、４小節目、11小節目で合計01.90秒間に減少した。

反対に子ども役の学生を見ながら伴奏している部分（○○○○）は１小節目、２～４小節目、５～10小節目、11～13小節目で合計25.30秒間に増加した。

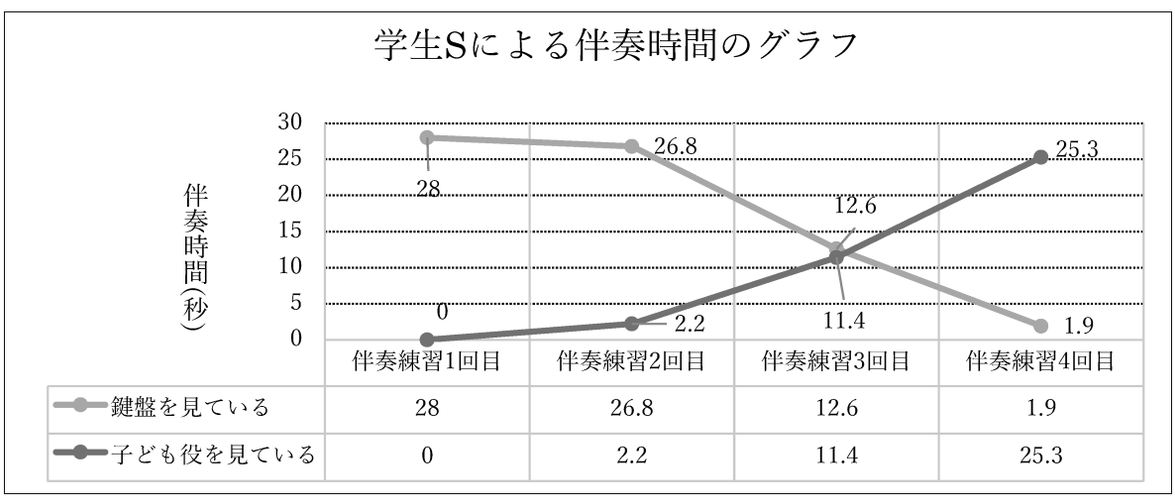


図７　学生Ｓによる伴奏時間のグラフ

学生Ｓによる伴奏時間のグラフ（図７）を参照すると、回を重ねるごとに子ども役の学生を見ながら伴奏している時間が徐々に長くなり、鍵盤や楽譜を見る時間は徐々に減少していることがわかる。伴奏練習４回目では子ども役の学生を見ながら伴奏する時間が逆転していることが見てとれる。

４　学生Ｎの伴奏分析

（１）学生Ｎの画像と伴奏分析図による分析

図８　伴奏練習１回目

図９　伴奏練習２回目

図 10　伴奏練習３回目

図 11　伴奏練習４回目

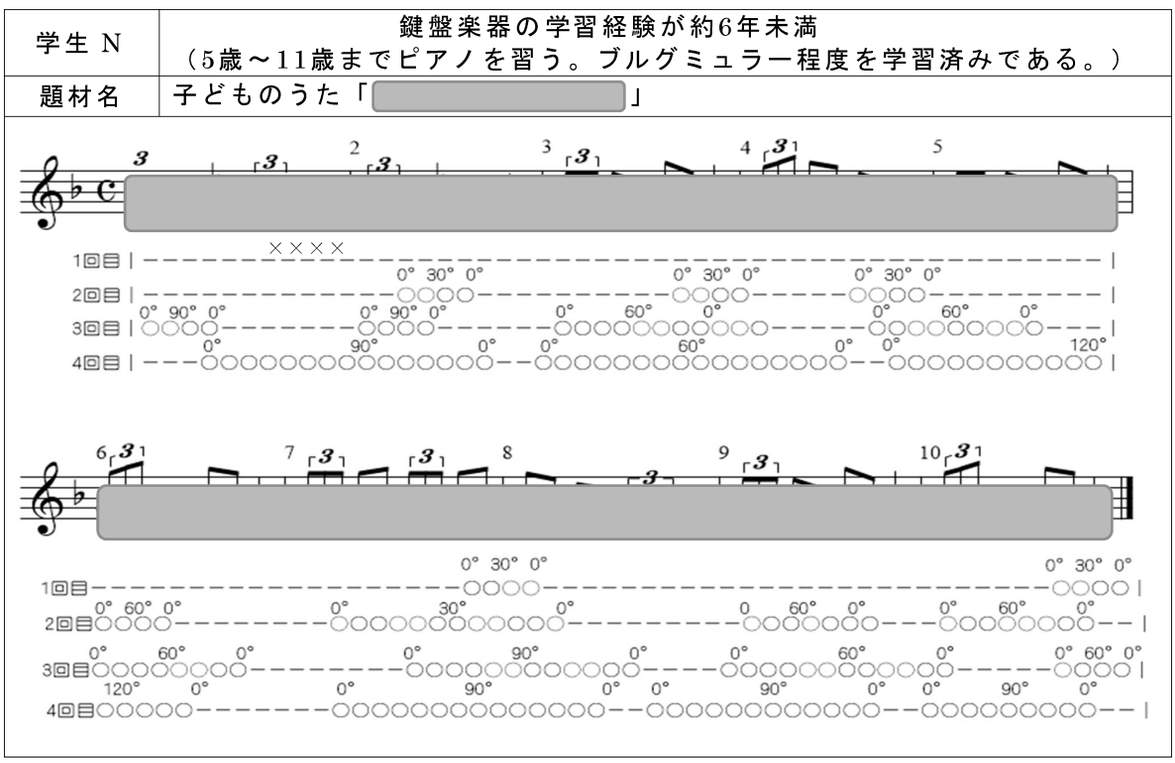


図 12　学生Ｎの伴奏分析図

伴奏練習１回目（図８及び図 12 参照）では、７小節目と 10 小節目（伴奏の弾き終わり部分）の２か所において、約 30°の角度で子ども役の学生の方を向いて伴奏することができた。

伴奏練習２回目（図９及び図 12 参照）では、約 30°の角度で４回、約 60°の角度で３回、合計７回の頻度で子ども役の学生の方を向いて伴奏することができた。

伴奏練習３回目（図 10 及び図 12 参照）では、約 60°が７回、約 90°が２回の角度と頻度で子ども役の学生の方を向いて伴奏することができた。

伴奏練習４回目（図 11 及び図 12 参照）では、約 60°が１回、約 90°が４回、約 120°が１回の角度と頻度で子ども役の学生の方を向いて伴奏することができた。

（2）学生Ｎの伴奏分析表及び伴奏時間のグラフによる分析

表４　学生Ｎの伴奏分析表

伴奏練習１回目	－－－－（楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している部分）	１～７小節目	00.00 ～ 14.70	14.70
		７～ 10 小節目	15.30 ～ 22.50	07.20
				合計 21.90
	××××（ミスタッチ）	２小節目	02.45 ～ 02.55	00.10
	○○○○（子ども役の学生を見ながら伴奏している部分）	７小節目	14.70 ～ 15.30	00.60
		10 小節目	22.50 ～ 23.00	00.50
				合計 01.10
伴奏練習２回目	－－－－（楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している部分）	１小節目	00.00 ～ 02.50	02.50
		２～３小節目	03.80 ～ 05.80	02.00
		４小節目	07.00 ～ 08.50	01.50
		５小節目	09.60 ～ 11.80	02.20
		６～７小節目	12.80 ～ 14.70	01.90
		８小節目	16.20 ～ 19.00	02.80
		９～ 10 小節目	20.00 ～ 21.40	01.40
				合計 14.30
	○○○○（子ども役の学生を見ながら伴奏している部分）	２小節目	02.50 ～ 03.80	01.30
		３小節目	05.80 ～ 07.00	01.20
		４小節目	08.50 ～ 09.60	01.10
		６小節目	11.80 ～ 12.80	01.00
		７小節目	14.70 ～ 16.20	01.50
		９小節目	19.00 ～ 20.00	01.00
		10 小節目	21.40 ～ 23.00	01.60
				合計 08.70
伴奏練習３回目	－－－－（楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している部分）	１小節目	00.00 ～ 00.90	00.90
		１小節目（２度目）	01.50 ～ 03.10	01.60
		２小節目	04.50 ～ 05.90	01.40
		４小節目	08.80 ～ 09.90	01.10
		５小節目	10.40 ～ 12.00	01.60
		６小節目	13.40 ～ 17.20	03.80
		８小節目	18.90 ～ 20.30	01.40
		９小節目	22.70 ～ 23.00	00.30
				合計 12.10
	○○○○（子ども役の学生を見ながら伴奏している部分）	１小節目	00.90 ～ 01.50	00.60
		２小節目	03.10 ～ 04.50	01.40
		３～４小節目	05.90 ～ 08.80	02.90
		５～６小節目	09.90 ～ 10.40	00.50
		７～８小節目	12.00 ～ 13.40	01.40
		８～９小節目	17.20 ～ 18.90	01.70
		10 小節目	20.30 ～ 22.70	02.40
				合計 10.90

伴奏練習 ４回目	－－－－（楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している部分）	１小節目	00.00 ～ 01.10	00.10
		２小節目	04.50 ～ 04.80	00.30
		４小節目	09.00 ～ 09.70	00.70
		６小節目	12.40 ～ 14.60	02.20
		８小節目	17.00 ～ 17.70	00.70
				合計 04.00
	○○○○（子ども役の学生を見ながら伴奏している部分）	１～２小節目	01.10 ～ 04.50	03.40
		３～４小節目	04.80 ～ 09.00	04.20
		５～６小節目	09.70 ～ 12.40	02.70
		７小節目	14.60 ～ 17.00	02.40
		８～ 10 小節目	17.70 ～ 23.00	05.30
				合計 18.00

伴奏練習１回目（表４参照）では、楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している部分（－－－－）は１～７小節目、７～ 10 小節目で合計 21.90 秒間であった。子ども役の学生を見ながら伴奏している部分（○○○○）は７小節目、10 小節目で合計 01.10 であった。

伴奏練習２回目（表４参照）では、楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している部分（－－－－）は１小節目、２～３小節目、４小節目、５小節目、６～７小節目、８小節目、９～ 10 小節目で合計 14.30 秒間であった。子ども役の学生を見ながら伴奏している部分（○○○○）は２小節目、３小節目、４小節目、６小節目、７小節目、９小節目、10 小節目で合計 08.70 秒間であった。

伴奏練習３回目（表４参照）では、楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している部分（－－－－）は１小節目（１小節内で２度見た）、２小節目、４小節目、５小節目、６小節目、８小節目、９小節目で合計 12.10 秒間であった。子ども役の学生を見ながら伴奏している部分（○○○○）は１小節目、２小節目、３～４小節目、５～６小節目、７～８小節目、８～９小節目、10 小節目で合計 10.90 秒間であった。

伴奏練習４回目（表４参照）では、楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している部分（－－－－）が１小節目、２小節目、４小節目、６小節目、８小節目で合計 04.00 秒間であった。子ども役の学生を見ながら伴奏している部分（○○○○）は１～２小節目、３～４小節目、５～６小節目、７小節目、８～ 10 小節目で合計 18.00 秒間であった。

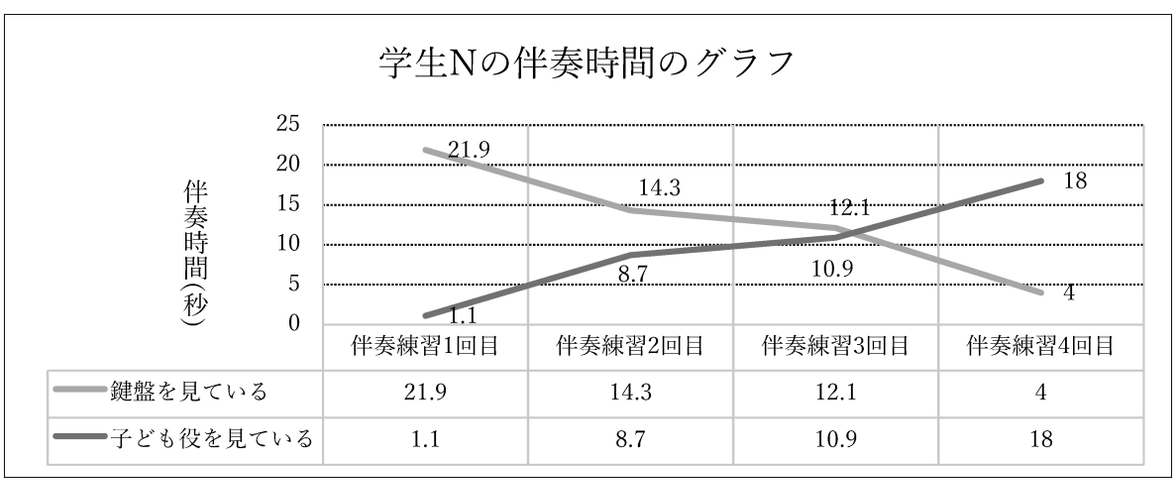


図 13　学生Ｎの伴奏時間グラフ

学生Ｎによる伴奏時間のグラフ（図 13）を参照すると、回を重ねるごとに子ども役の学生を見ながら伴奏している時間が徐々に長くなり、鍵盤や楽譜を見ながら伴奏する時間は徐々に減少していることがわかる。伴奏練習４回目では子ども役の学生を見ながら伴奏する時間が逆転していることが見てとれる。

５　学生Ｄの伴奏分析

（１）学生Ｄの画像と伴奏分析図による分析

伴奏練習1回目
伴奏することができなかったため画像は無い。

図 14　伴奏練習 1 回目

伴奏練習2回目
伴奏することができなかったため画像は無い。

図 15　伴奏練習 2 回目

図 16　伴奏練習 3 回目

図 17　伴奏練習 4 回目

学生 D	鍵盤楽器の学習経験が約3年未満 （6歳～9歳までピアノを習う。バイエル前半程度を学習済みである。）
題材名	子どものうた「　　」

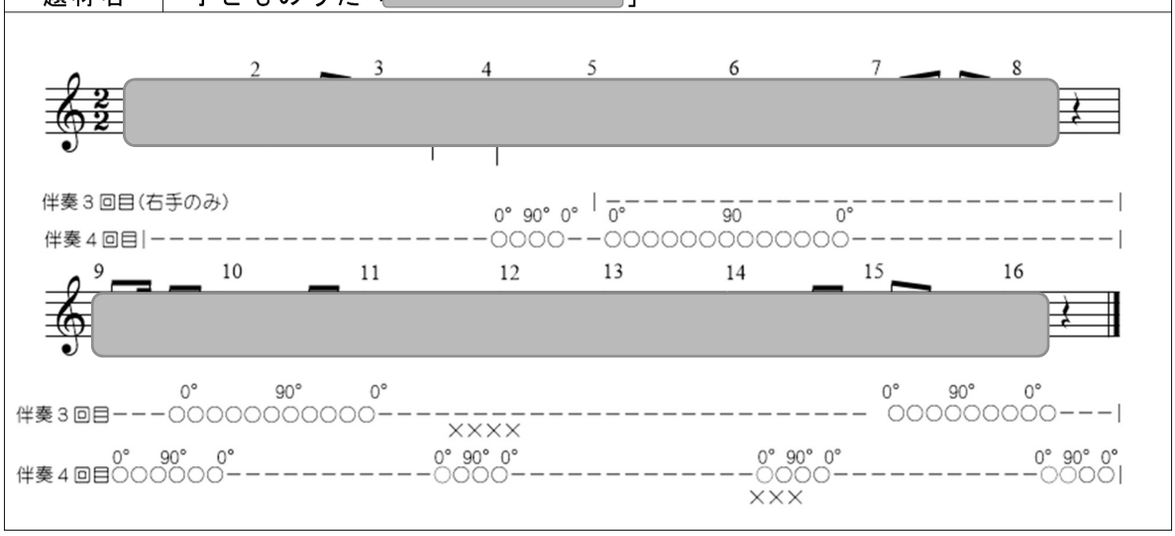


図 18　学生Ｄの伴奏分析図

鍵盤楽器の学習経験が３年未満の学生Ｄは、授業に参加したものの、伴奏する自信がなく、伴奏練習１回目と伴奏練習２回目は伴奏することができなかった（図 14 及び図 15 参照）。初めての伴奏練習である伴奏練習３回目では、前奏を弾くことができず、本奏を右手の旋律のみで伴奏した。前奏を弾くことができなかったので、歌の出だしを合図するために学生Ｄは「さんはい」と声かけをしてから伴奏を弾いた。

伴奏練習３回目（図 16 及び図 18 参照）では片手弾きで 11 小節目にミスタッチ（××××）をしながらではあったが、約 90° の角度で２回、子ども役の学生の方を向いて伴奏することができた。

伴奏練習４回目（図 17 及び図 18 参照）では両手で弾くことが可能になり、また前奏も弾くことが可能になった。約 90° の角度で６回、子ども役の学生の方を向いて伴奏することができた。

（2）学生Dによる伴奏分析表と伴奏時間グラフの分析

表５　学生Ｄの伴奏分析表

伴奏練習３回目	－－－－（楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している部分）	５～９小節目 11 ～ 13 小節目 16 小節目	00.00 ～ 04.80 06.80 ～ 12.40 16.20 ～ 17.00	04.80 05.60 00.80
				合計 11.20
	○○○○（子ども役の学生を見ながら伴奏している部分）	９～ 10 小節目 15 小節目	04.80 ～ 06.80 12.40 ～ 16.20	03.00 03.80
				合計 06.80
伴奏練習４回目	－－－－（楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している部分）	１～３小節目 ４小節目 ７～８小節目 10 ～ 11 小節目 12 ～ 13 小節目 15 ～ 16 小節目	00.00 ～ 04.00 04.50 ～ 05.50 08.80 ～ 10.40 11.70 ～ 13.30 14.50 ～ 16.30 17.70 ～ 18.30	04.00 01.00 01.60 02.60 02.80 01.60
				合計 13.60
	××××（ミスタッチ）	12 小節目	16.40 ～ 17.00	00.60
	○○○○（子ども役の学生を見ながら伴奏している部分）	４小節目 ５～６小節目 ９小節目 11 小節目 14 小節目 16 小節目	04.00 ～ 04.50 05.50 ～ 08.80 10.40 ～ 11.70 13.30 ～ 14.50 16.30 ～ 17.70 18.30 ～ 19.00	00.50 02.30 01.30 01.20 01.40 01.30
				合計 08.00

伴奏練習３回目（表５参照）では、楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している部分（－－－－）は５～９小節目、11 ～ 13 小節目、16 小節目の合計 11.20 秒間であった。子ども役の学生を見ながら伴奏している部分（○○○○）は９～ 10 小節目、15 小節目で合計 06.80 秒間であった。

伴奏練習４回目（表５参照）では楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している部分（－－－－）は１～３小節目、４小節目、７～８小節目、10 ～ 11 小節目、12 ～ 13 小節目、15 ～ 16 小節目で合計 13.60 秒間であった。一方、子ども役の学生を見ながら伴奏している部分（○○○○）は４小節目、５～６小節目、９小節目、11 小節目、14 小節目、16 小節目で合計 08.00 秒間であった。

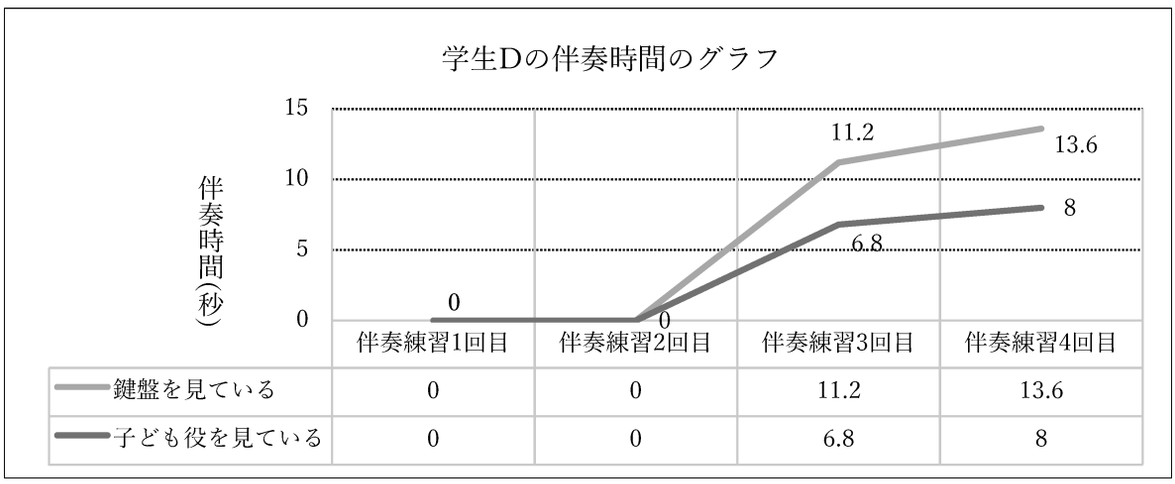


図 19　学生Ｄの伴奏時間グラフ

図 19 のグラフを参照すると、伴奏練習３回目も４回目も鍵盤を見ている時間の方が長い。子ども役の学生を見ながら伴奏する時間を比較すると３回目より４回目の方が微増していることがわかる。

Ⅲ　結果と考察

１　学生Ｓの結果と考察

伴奏練習１回目（図６及び表３参照）では、記号（－－－－－）は曲の最後まで継続していることから、子ども役の学生を全く見ることなく伴奏していた。

リズムや拍子が不安定になった部分（▲▲▲▲）は２小節目 00.50 秒間と 12 小節目 01.00 秒間であったが、これらの部分は「歌い始め」や「歌い終わり」の箇所である。

学生Ｓは「子ども役の学生の歌いはじめや歌い終わりの部分を意識してしまい、緊張して演奏が乱れた」とコメントしていることから、伴奏において「歌いはじめ」や「歌い終わり」の部分の伴奏が特に難しかったことが考えられる。

伴奏練習２回目（図６及び表３参照）では楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している部分（－－－－）は１～７小節目、８小節目、９小節目、10 小節目、11 ～ 13 小節目の合計 26.80 秒間であった。子ども役の学生を見ながら伴奏している部分（○○○○）は７小節目、８小節目、９小節目、10 小節目で合計 02.20 秒間であった。すなわち、伴奏練習２回目でも曲のほとんどを楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏していることがわかる。

しかし、７小節目、８小節目、９小節目、10 小節目の中でも、子ども役の学生を見ることができた箇所があり、その部分は単純な音の配列でできているため、その箇所が弾きやすかったことが挙げられる。また休符（＝休み）もあることから伴奏に余裕ができ、約 30° の角度で子ども役の学生を見ることができたと考えられる。

伴奏練習３回目（図４、図６及び表３参照）では、顔は鍵盤の方をまだ見ているが、体や足が学生の方に向けることができるようになっており、約 30° の角度で５回、子ども役の学生を見ながら伴奏している。子ども役の学生を見ながら伴奏している部分（○○○○）は前回の 02.20 秒間から 11.40 秒間に増加した。逆に楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している部分（－－－－）の合計が 12.60 秒間に減少していることから、楽譜や鍵盤を見ながら伴奏している時間と子ども役の学生を見ながら伴奏している時間がほぼ同じ長さになったことが読み取れる。

伴奏練習４回目（図５、図６及び表３参照）ではミスタッチはするものの、顔、体や足のすべてが子ども役の学生の方に向き、約 30° の角度で３回、約 90° の角度で３回、子ども役の学生を見ながら伴奏ができるようになった。また時間に関しても全 13 小節中、11 小節分の長さに相当する 25.30 秒間、子ども役の学生を見ながら伴奏ができるようになった。逆に楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している時間は前回の 12.06 秒間から 01.90 秒間にさらに減少した。

録画映像の視聴と振り返り学習では学生Ｓは次のようにコメントした。

①録画映像を視聴後、子ども役の学生を見ながら伴奏しているつもりだったが、自分が思っているほど、子ども役の学生を見ながら伴奏していないことに気が付いた。

②椅子を鍵盤楽器に向かって斜めにおくか、子ども役の学生の方に向けて約 90° の角度で置くことで、体が自然に子どもの方に向いた。
③自分自身が伴奏する様子を客観的に動画で視聴し、参考にすることによって、その後の演奏改善に役立てることができた。

これらのコメントから自分自身を録画した動画を客観的に視聴した後、話し合う機会を持ち、自身を振り返ることはその後の演奏改善に良い影響があったと考えられる。

図 20　振り返りの様子

伴奏練習１回目から伴奏練習４回目（図６及び図７参照）までを通して比較すると、回数を重ねるごとに子ども役の学生を見ながら伴奏することができた時間が増加している。また動画を視聴し、話し合いをした後の伴奏練習では記号（○○○○）の数が増えたことがわかる。

このことから自分自身や他の学生の伴奏を客観的に視聴したことが、子どもを見ながら伴奏する技術に大きく影響したと考えられる。

２　学生Ｎの結果と考察

伴奏練習１回目（図 12 及び表４参照）では学生Ｎは他学生に見られていたので緊張したらしく、２小節目（前奏部分）でミスをして弾き直した。楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏していた時間は合計 21.90 秒間であった。一方、子ども役の学生を見ながら伴奏することができた部分は７小節目と 10 小節目（伴奏の弾き終わり部分）の２か所であった。約 30° の角度で、約 0.3 秒間ずつ合計 01.10 間、子ども役の学生の方に顔を向けることができた。

伴奏練習２回目（図 12 及び表４参照）では楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏していた長さは合計 13.95 秒間であった。子ども役の学生を見ながら伴奏した長さは合計 08.70 秒間で、伴奏練習１回目より 07.60 秒間長く子ども役の学生を見ながら伴奏することができた。

子ども役の学生の方を見ることができた角度は約 30° で２回、約 60° で３回の計５回の頻度で子ども役の学生を見ながら伴奏することができた。

伴奏練習３回目（図 12 及び表４参照）では子ども役の学生の方を見ることができる回数が９回に増え、約 60° の角度で７回、約 90° の角度で２回、合計 10.90 秒間、子ども役の学生の方を向いて伴奏をすることができた。楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している時間は合計 12.10 秒間だったので、伴奏練習３回目で楽譜や鍵盤を見ている時間と子ども役の学生を見ている時間がほぼ同じになったことがわかる。

伴奏練習４回目（図 12 及び表４参照）では楽譜もしくは鍵盤を見ながら伴奏している時間は合計 04.00 秒間に減少し、子ども役の学生を見ながら伴奏している時間は合計 18.00 秒間に増加した。また子ども役の学生の方を向いた角度と頻度は約 90° が４回、約 120° が１回であった。

伴奏練習１回目から比較すると（表４及び図 13 参照）、伴奏練習１回目では子ども役の学生の方を見る総時間数は 0.6 秒間であったのに対し、伴奏練習４回目の総時間は計 20.15 秒間になったことから大幅に長く子ども役の学生の方を見ながら伴奏できたことがわかる。

学生Ｎの特徴として、図 12 を参照すると伴奏練習１回目はミスタッチが１度あったが、伴奏練習２回目以降はミスタッチを表す記号（××××）やテンポが不安定になる記号（▲▲▲▲）が全くなかった。これは学生Ｎの伴奏がリズムの乱れや、テンポの遅れがなく、ミスタッチをしなかったからである。ミスタッチをしないように伴奏するため、左手のコードが変わる直前に鍵盤を見る傾向が何度かあったが、それは間違えずに伴奏を弾くために、何度も鍵盤を見て確認しながら伴奏したことが原因であると考えられる。

３　学生Ｄの結果と考察

鍵盤楽器の学習経験が３年未満の学生Ｄは、授業に参加したものの、伴奏する自信がなく、伴奏練習１回目と伴奏練習２回目は伴奏することができなかった。初めての伴奏練習である伴奏練習３回目では、前奏を弾くことができず、本奏を右手の旋律のみで伴奏した。前奏を弾くことができなかったので、歌の出だしを合図するために「さんはい」と声かけをしてから伴奏を弾きだした（図 18 参照）。

伴奏練習３回目（表５参照）では片手弾きでミスタッチ

をしながらではあったが、約90°の角度で２回、合計6.80秒間、子ども役の学生の方を見ながら伴奏することができた。図18伴奏分析図の○と×に注目すると、子ども役の学生の方に顔、首や体が向いている時（○○○○）に、間違い（××××）が生じやすく、その直後に鍵盤を見なおしていることがわかる。また14小節目にミスタッチ（××××）があるが、これは左手の飛躍音をうまくとらえることができなかったためだと思われる。伴奏後、振り返りの話し合いでは、「ミスタッチを防ぐには鍵盤上における音の距離をあらかじめ覚えておかなければならない。」と感想を述べており、振り返りを行うことで伴奏練習４回目ではミスタッチを克服することができたと考えられる。

伴奏練習４回目（表５参照）では約90°の角度で６回、合計08.00秒間、子ども役の学生の方を見ながら両手で前奏から伴奏することができた。学生Ｄは鍵盤楽器の学習経験が浅かったが、子どもの方を見ながら伴奏をする方法を理解し、練習を重ねることで、子ども役の学生を見ながら伴奏をすることができるようになった。

４　考察のまとめ

Ⅰ「研究の背景と目的」に記載した山本・鈴木の研究[7]では、伴奏練習を１回しか行わず、練習を重ねた変化や結果については検証していなかった。また対象者の鍵盤楽器の学習経験や熟達度についても明らかにしていなかった。そこで本研究では３人の対象者を伴奏楽器の演奏経験歴に分けて、伴奏練習を重ねた結果や変化に注目して調査を行った。

録画した動画をグループで視聴し、話し合った学生ＳとＮは、顔、体や足の全てを子ども役の学生の方に向けることで、鍵盤楽器は弾きづらくなるが子ども役の学生に向きやすくなることに気づき、その後、伴奏練習を重ねることで、見る時間が徐々に長くなり、顔を向ける角度や頻度の数値も上昇した。

利根川智子（2013）は「省察力は保育者にとって重要な保育実践上の資質の一つと考えられており、保育者養成において、省察する力をどのように育成するかは重要な課題である。」[8]と述べているが、省察とは「自分自身をかえり見て、そのよしあしを考えること。」[9]と記されている。今回の研究において、自分自身を録画した動画を客観的に視聴した後、グループで話し合う機会を持ち、自身を省察する（＝振り返る）ことは、保育者の資質向上に重要であり、技術を習得する上でも、有効な手段であったと考えられる。

学生Ｄは、１回目と２回目の伴奏練習を躊躇して伴奏することができなかったが、話し合いを見学していたので、伴奏練習３回目が最初の練習であったにもかかわらず、子ども役の学生を見ながら伴奏することができた。また伴奏練習４回目では子ども役の学生を見ながら伴奏する時間がより長くなり、回数も多くなった。

この結果から子ども役の学生を見ながら伴奏する技術練習は、上達の個人差はあるが、鍵盤楽器の学習経験の浅い学生でも技術習得が可能であり、全ての学生に有効かつ有意義な練習方法であった。

技術修得の練習後、３人の学生に質問紙調査を行った。子どもの方を見ながら伴奏する能力は全員が必要であると回答し、子ども役の学生を見ながら伴奏を弾く練習により伴奏技術が向上したと全員が回答した。

このことから子ども役の学生を見ながら伴奏する練習は、学生が保育者の資質を向上するために必要であり、実習や就職前にこれらの機会を持つことは有意義な取り組みであったと考えられる。

５　今後の課題

今回は効率よく技術を習得するために、鍵盤や楽譜をできるだけ見ずに伴奏したが、実際の伴奏では鍵盤や楽譜を目視して音や歌詞を確認することも重要である。３人の伴奏曲を同一にした方がより詳細な比較ができたと考えられるが、学生が意欲的に取り組み、自信につなげることを優先したため、それぞれのレベルに合わせた曲を選曲することとした。

また今回は横向きの姿勢で伴奏したが、鍵盤楽器の形状や位置が違う場合は体や首の角度も変化することが考えられる。今後の研究では、各々の保育現場で使用されている鍵盤楽器の形状や向きに対応して調査を行う必要がある。また曲の難易度によって、子どもの方を向く角度や頻度にも変化があると考えられ、より多くのサンプルをデータ化し調査する予定である。今回の研究で得た結果を実際の保育現場でいかすことにより、子どもの行動や心情に変化や効果、意義があるのかを検証していく予定である。

文献

１）竹下則子（2017）．保育者養成校におけるピアノ伴奏技術の育成－子どもに視線を送りながら伴奏する技術について－　びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部 外部連携研究センター年報，4，1-120
２）西海聡子・笹井邦彦・細田淳子（2017）．保育者養成における弾き歌いのためのコード伴奏法　東京家政大学研究紀要，57，59-68
３）文部科学省（2018）．保育所保育指針 第５章 職員の資質向上，1-373

4）文部科学省（2002）．幼稚園教員の資質向上に関する調査研究 幼稚園教員の資質向上について　自ら学ぶ幼稚園教員のために　協力者会議報告書
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/019/toushin/020602.htm（2019 年 7 月 26 日）
5）後藤紀子（2017）．保育表現技術に添えるピアノ指導法の予備的研究－保育者養成校における音楽指導の在り方の提案に向けて－　現代人間学部紀要，10，67-92
6）小澤和恵（2009）．保育所・幼稚園実習で求められる音楽活動の考察－生活の歌と季節の歌について－　埼玉純真短期大学研究論文集，2，1-15
7）山本学・鈴木慶子（2018）．子どもたちの歌のピアノ伴奏をする保育者の視線に関する調査と一考察　静岡県立大学短期大学紀要，32-W，1-10
8）利根川智子・音山若穂・和田明人・三浦主博・井上孝之・滝田良子・上村裕樹（2013）．保育者省察尺度の妥当性検討についての一研究　会津大学短期大学部研究紀要，70，1-26
9）広辞苑 第 7 版（2018）．岩波書店，p.1604

Developing Teaching Skills in Music at Teacher Training Colleges : The Skills to Play the PianoFacing and Paying Attention to Children

Noriko Takeshita
Osaka University of Comprehensive Children Education Graduate School

In order to communicate with the children, they are caring and teach them how to express their feeling, care-givers should keep an eye on them when playing the piano and always check the children's condition to assure their safety.

We often observe trainee students play the piano at a day care, staring at music notes only and seldom turn their heads towards the children they are caring.

Students practice singing and playing the piano at the same time in university classes, but they are not given an opportunity to practice playing while paying attention to the children and their surroundings. Therefore, most of them are unable to play the piano for accompaniment using this skill.

In my previous study, we conducted an accompaniment practice while watching the classroom atmosphere and the state of the students who were playing the role of children. After watching the video recordings of the accompaniment, we discussed problems and the way for solving them in active learning format. We tried to find the way to acquire such skills as well.

In this study, 3 students with different level of experience in playing the piano were selected from among 20 students. We analyzed and discussed in details how the angle of the students' face, neck and body improves according to the amount of time they practice together with the timing and the amount of attention extended to the students who are playing the role of the children.

Key words：childcare workers, how to play the accompaniment of the piano, skills of accompaniment, facing and paying attention to children and surroundings